



(245)

小学校高学年向け 年組

町煉瓦窯はなぜ「奇跡的」？

野木町のシンボルである重要文化財の町煉瓦窯（同町野木）は来年、建設から135年を迎える。大量生産を可能にしたホフマン式輪窯の中で、国内で唯一原形をとどめる。数々の地震に耐え抜いた姿に関係者からは「奇跡的」との声が上がる。日本の近代化を支えた産業遺産の歴史を改めて調べてみた。

（柴田正人）

野木

まずは同窯の調査研究や来訪者のガイド役などを務めるボランティア団体「町煉瓦窯を愛する会」の事務局を訪ねた。

同会資料によると、1888（明治21）年、赤煉瓦需要に応え現在地に煉瓦製造会社設立、90年に東窯（現在の町煉瓦窯）が完成した。外周約100mの正16角形で、中央部には約35mの煙突がそびえ立つ。生産量は年間250万〜300万個を誇り、1971年に操業を終えた。



⑦

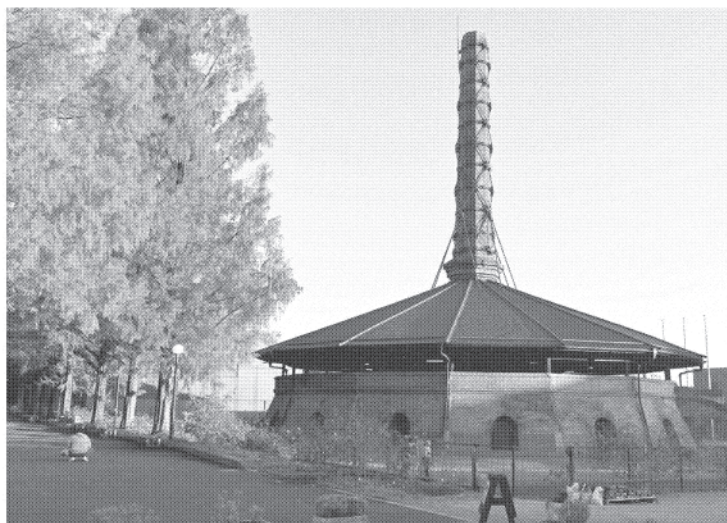
課題は少なくない。原形保存を願う町内外のファンによる支援の輪も徐々に広がる。ふるさと納税などにより寄せられた寄付金や募金は計約1742万円（毎週水、木、金曜掲載。県南版は木曜）

7千円（10月末）に上る。真瀬町長は「町の宝として、何としても残していかなければ」と力を込めた。

原料の粘土は近くの渡良瀬遊水地、川砂は思川からそれぞれ調達。煉瓦窯の場所としては恵まれていたが、同会の安倍恒夫会長は「川に近いだけに地盤は弱い」と指摘する。加えて、外壁などを覆う煉瓦は横揺れに弱いとされる。「雨などが染み込んで煉瓦そのものを壊す塩類風化の問題も考えれば、今残っているのは奇跡的」と断言する。

2008年に窯と周辺の土地を取得した町は、国や県の補助を受けて11、14年度に本格的な保存修理を実施。憩いの場として、新たなスタートを切った。

窯が原形のまま残る要因の一つとして、真瀬宏子町長は「バランスが取れた16角形」と推測するが、塩類風化をはじめ保存に向けた



煉瓦色に染まったメタセコイアと煉瓦窯

災害耐え、130年超原形保つ

設問

【1】野木町煉瓦窯は、2025年に建設から何年を迎えるのでしょうか。

【2】野木町煉瓦窯の歴史について、次の表にまとめました。

（ア）～（ウ）に当てはまる年（西暦）を答えてみましょう。

年	出来事
（ア）年	現在地に煉瓦製造会社が設立
（イ）年	東窯（現在の町煉瓦窯）が完成
（ウ）年	操業を終える

【3】野木町煉瓦窯が「奇跡的」と言われるのは、どのような理由からでしょうか。正しいものの記号を答えてみましょう。

A 野木町煉瓦窯は、大量生産を可能にしたホフマン式輪窯（※）だから。

B 野木町煉瓦窯は、年間250万から300万個の煉瓦を生産ができたから。

C 野木町煉瓦窯は、ホフマン式輪窯の中で、国内でただ一つ建設当時の姿のままだから。

D 野木町煉瓦窯は、渡良瀬川の粘土、思川の川砂など、煉瓦窯の近くから材料が調達できるから。

※ホフマン式輪窯…多数の焼成室を環状（円形、楕円形等）に配置して、連続して煉瓦を製造できるようにしたもの。ドイツ人技師のホフマンが考案した。

【4】野木町煉瓦窯の保存に際し、県内外のファンによる支援の寄付金や募金はいくらになっていますか（2024年10月末現在）。

【発展】野木町煉瓦窯は、1979年に文化庁より近代化遺産の重要文化財に指定されました。栃木県内には、国や県、市などから文化財として指定されたものが、数多くあります。県内の何市にどのようなものがあるのか、調べてみましょう。